東南アジア古代史における仏教の展開：5 世紀～19 世紀を中心に（ver 2.1 2014-07-10）

講義の目標

唐の仏僧義浄は、25 年間にわたって東南アジアを含む 30 以上の国々を巡ったのち、695 年に帰国して多数のサンスクリット経典を持ち帰った。それから半世紀を経て、奈良の東大寺で大仏開眼会が挙行された 752 年頃、東南アジアのジャワ島ではボロブドゥールの建設が始まろうとしていた。それからさらに半世紀を経た 806 年になると、中国から帰国した空海が日本に真言密教の基礎を築くが、ちょうどその頃ボロブドゥールは完成した。この世界最大級の仏教建造物には密教の要素も組み込まれている。興味深いことに、空海の密教の教えには東南アジアを経由してインドから中国に渡った金剛智の教えが含まれている。

このように、世界史における東南アジアの仏教は大乗仏教の発達と深く関わっており、「南伝仏教」という概念では一括りにできない。また、大乗仏教と対をなす「小乗仏教」という用語も「上座部仏教」と言い換えるだけで片づくものではない。この講義では大乗仏教が展開した 5～9 世紀の東南アジアを再検討することで、上座仏教とイスラームが広がる以前の東南アジアにおける（大乗と非大乗を併せた）仏教のダイナミズムを理解することをめざす。

最後に、東南アジアにおける上座仏教の展開についても概観する。

1. 東南アジアの地理

（海域と流域を中心として西から東に）

1) マレー半島、スマトラ島、ジャワ島
2) エーヤーワディー（イラワジ）川流域、サルウィン川流域*、チャオプラヤー川流域、メコン川流域*、ベトナム（南シナ海沿岸）、（*はチベット高原に水源）

2. 東南アジアの主な民族分布

（地理的分布を基準に西から東に）

1) チベット・ビルマ系：ピュー族、ビルマ族
2) タイ系（Tai）：シャム族、ラオ族、シャン族。（シャム族はタイ族 Thai とも呼ばれる）
3) モン・クメール系：モン族（Mon）、クメール族
4) オーストロネシア系：チャム族、マレー族、ジャワ族
5) ベト・ムオン系：キン族（ベト族）

3. インドにおける仏教の発展

1) 原始仏教（初期仏教）
   - 仏滅年代 1）紀元前 544 年（スリランカ伝承）、2）紀元前 386 年（中国伝承）
2) 部派仏教
   - 根本分裂：仏滅から 100 余年→保守派：上座部、改革派：大衆部（だいしゅぶ）
   - 枝末分裂：その後、大衆部、上座部、説一切有部、正量部などに分派。

   紀元前 100 年頃までに部派分裂はほぼ終息。
3) 大乗仏教
   - 紀元後 100 年頃に誕生。
   - 1 世紀～3 世紀頃、『般若経』『法華経』『華厳経』『維摩経』初期大乗経典の成立。
   - 650 年頃、中期密教経典『大日経』、680 年頃、中期密教経典『金剛頂経』の成立。

✧ 大乗仏教は部派に共通した運動（特定の部派に由来しない）
✧ 大乗仏教は出家僧が主導した運動（在家信徒主導の運動ではない）
✧ 大乗仏教はそれ以前の仏教を否定するものではない

4) 重要なインド史上の動き
   - マウリヤ朝アショーカ王（前 268 年頃即位）：スリランカなどに仏教伝道。
   - グプタ朝（320 年～6 世紀）：チャンドラグプタ 1 世（320 年即位）が創建。ヒンドゥー教に基づく古典的サンスクリット宮廷文化が発達。他宗教にも寛容でナーランダー寺院を創建（5 世紀）。

4. 仏僧往来の記録

1) 法顕（337 年－422 年）：中国東晋時代の僧。399 年、陸路インドに至り、インド本土・スリランカで経典を求めた。412 年、海路中国に帰国。『法顕伝』を著述。
2) 求那跋摩（Gunavarman、367－431 年）：インドの僧。スリランカ、ジャワ（闍婆）を経て南朝の宋に大乗戒を伝える。『高僧伝』に記載。
3) 玄奘（602 年－664 年）：中国唐代初期の僧。629 年、西域を経てインドに至り、ナーランダー寺院などでの仏教研究と仏跡の巡礼をおこない、大部の経典を持って、645 年、陸路帰国。『大唐西域記』を著述。
4) 義浄（635 年－715 年）：中国唐代の僧。671 年、広東から海路インドに至り、20 余年仏跡巡礼ののち、シュリーヴィジャヤなど南海諸国を経て 695 年、海路帰国。『南海寄帰内法伝』、『大唐西域求法高僧伝』を著述。
5) 金剛智（Vajrabodhi、669 年－741 年）：南インド生まれ。龍智から『金剛頂瑜伽経』『毘盧遮那総持陀羅尼』などを学ぶ。菩薩の夢のお告げで師子国（スリランカ）へ渡る。さらに中国へ向かうため、波斯（ペルシャ）の商船に乗り 718 年頃、仏逝国（シュリーヴィジャヤ）に到る。風待ちのため五か月滞在。難破の危地を脱して 720 年唐に到る。『貞元新定釈教目録』巻 14 に記載。
6) 不空（Amoghavajra、705 年－774 年）：南インド生まれ。708 年、闍婆（ジャワ）において金剛智と会い、弟子になり、師とともに唐に到る。不空の弟子の恵果の弟子の一人が空海（804-806 年在唐）。『貞元新定釈教目録』巻 15 巻に記載。

5. 東南アジアの「インド化」した諸国

✧ 4－5 世紀以降、東南アジアの「インド化」が始まり、グプタ朝の古典的サンスクリット文化は南インド、東南アジアに広がった。ヒンドゥー教、仏教も伝播。

1) 耶婆提（ヤヴァドヴィーパ、ジャワ島）：413 年頃、スリランカから中国への帰路、ジャワに滞在した法顕は「其國外道婆羅門興盛。佛法不足言。」と記録。
2) 室利察呾羅（シュリークシェートラ）：エーヤーワディー川下流のピュー人の国家。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、有部、正量部、上座部、大衆部が交えて実践されている。
3) 郎迦戍（ランカスカ、狼牙脩と同じ）：マレー半島中部の国家。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、有部、正量部、上座部、大衆部が交えて実践されている。
4) 杜和鉢底（ドゥヴァラパティー）：チャオプラヤー川下流のモン人の国家。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、有部、正量部、上座部、大衆部が交えて実践されている。
5) 扶南（カンボジア）：メコン川下流のクメール人の国家。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、かつて仏法が盛んに流布したが、悪王が出たために仏教教団は滅亡し、外道（ヒンドゥー教徒）が雑居している。
6) 林邑（チャンパー、占波城と同じ）：ベトナム中部のチャム人の国家。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、正量部が多く、少しではあるが有部も兼ねて行われている。この時期、チャンパーの都はベトナム中部アマラヴァティー（現在のクアンナム省）であった。
7) 室利佛逝（シュリーヴィジャヤ、尸利佛逝、室利佛誓と同じ）：スマトラ島中部東岸パレンバンのマレー人の国家。義浄の時代にはスマトラ島の婆魯師（バロス）、末羅遊（マラユ）を支配下に置いていた。7 世紀後半、義浄『南海寄帰内法伝』によると、シュリーヴィジャヤでは東南アジア諸国のなかで例外的に大乗仏教が実践されていた。

✧ 義浄『南海寄帰内法伝』によるとヒンドゥー教が栄えていた扶南と大乗仏教が実践されていた室利佛逝を除くと、概ね有部、正量部、大衆部、上座部が混じって実践されていた。

✧ シュリーヴィジャヤで大乗仏教が行われていたことは、7 世紀の古マレー語碑文からも明らかである。

✧ 義浄『南海寄帰内法伝』は大乗を重視する中国人に対して、大乗と小乗の区分は絶対的でないことを強調する。「有部、正量部、大衆部、上座部のなかで大乗と小乗の区分は定まっていない。北インドと東南アジアではもっぱら小乗が、中国では大乗が信奉されているが、他の地域では大乗と小乗は混ざって行われている。そもそも大乗も小乗も律の基本は同じだし、

四諦の教理も同じである。もし菩薩を礼拝し、大乗経典を読誦するのならば、これを大乗と名付け、もしそうでなければ小乗と呼ぶだけのことなのである。」

8) マタラム（ジャワ島）：中部ジャワ、732 年、チャンガル碑文。サンジャ王によるジャワ地域（Yawadwipa）の統合とシヴァ神の象徴リンガ建立の記録。

9) マタラム（ジャワ島）：中部ジャワ、782 年、クルラック碑文。インドラ王による文殊師利菩薩像を安置する祠堂の建立を記録。現存するセウ寺院遺跡に対応。ヒンドゥー教のブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神と仏教の仏法僧を等値する密教段階の大乗仏教。

6. ボロブドゥール仏教寺院

1) 建築物としてのボロブドゥール

1.1) 沿革

・Borobudur<Bara Budur。
・中ジャワ州クドゥ盆地。ジョグジャカルタの北西約 40km。
・千原：790 年頃着工。842 年チャンディ・プトゥン碑文、860 年以降に現在の形に完成。
・Dumarçay：775 年頃-790 年頃（第 1 期）。795 年頃-820 年頃（第 2 期）。860 年頃（第 3 期完了）。
・シャイレーンドラ王朝
・842 年チャンディ・プトゥン碑文：Śrī Kahulunnan（皇后陛下）が「kamūlan i bhūmi sambhāra（地・資糧）」という名の祠堂を寄進した。bara budur<bhāra [bhūdhara]

1.2) 建築物としての構造

・1 辺 120m の方形基壇。6 層の方形壇と 3 層の円形壇。高さ 42m。最上壇に直径 16m の鐘型中央仏塔。
・安山岩の切石（20-30cm）。55,000 立方 m。
・仏塔（stūpa）としては特異。祠堂（金堂）、僧院ではない。
・東正面。右繞（プラダクシナ）。
・ムンドゥット（3km）、パオン（1.8km）。ムンドゥット寺院：釈迦牟尼仏、世自在菩薩（右脇侍）、金剛手菩薩（左脇侍）。

1.3) 構造の意味

・三界説：欲界（kāmadhātu）、色界（rūpadhātu）、無色界（arūpyadhātu）。ただし、問題有り（三界六趣）。
・菩薩の十地（daśabhūmika）「三乗共の十地」 乾慧地、種姓地、八人地、見地、薄地、離欲地、已弁地（以上、声聞） 辟支仏地（縁覚）、菩薩地、仏地。『華厳経』「十地品」による十地。842 年チャンディ・プトゥン碑文。

2) 浮彫

・彫り（relief）、回廊（gallery）、主壁（main wall）、欄楯（balustrade）

	所在	典拠（漢訳仏典）	パネル数
11	第 4 回廊主壁	普賢菩薩行願讃	72
10	第 4 回廊欄楯	大方広華厳経入法界品（善財童子の 55 善知識歴訪）	84
9	第 3 回廊欄楯		88
8	第 3 回廊主壁		88
7	第 2 回廊主壁		128
6	第 2 回廊欄楯	本生譚および比喩経 前生物語『ジャータカ・マーラー』34 話	100
5	第 1 回廊欄楯下段		128
4	第 1 回廊欄楯上段		372
3	第 1 回廊主壁下段		120
2	第 1 回廊主壁上段	方広大荘厳経（仏伝）	120
1	隠れた基壇	分別善悪応報経（因果応報）	160
合計			1460

3) 仏像
・丸彫り。仏龕（niche）、円壇上の釣鐘形ストゥーパ。印相(mudrā)。

所在地	方位	仏像（推定）	印相	個数
円壇上ストゥーパ		釈迦牟尼仏（Śākyamuni）	転法輪印	72 体
第 4 回廊主壁上の仏龕	四方	毘盧舎那仏（Vairocana）	説法印（vitarka）	64 体
現基壇から第 3 回廊までの仏龕	東側	阿閦仏（Akṣobhya）	触地印	92 体
	南側	宝生仏（Ratnasaṃbhava）	与願印	92 体
	西側	阿弥陀仏（Amitābha/Amitāyus）	禅定印	92 体
	北側	不空成就仏（Amoghasiddhi）	施無畏印	92 体
合計				504 体

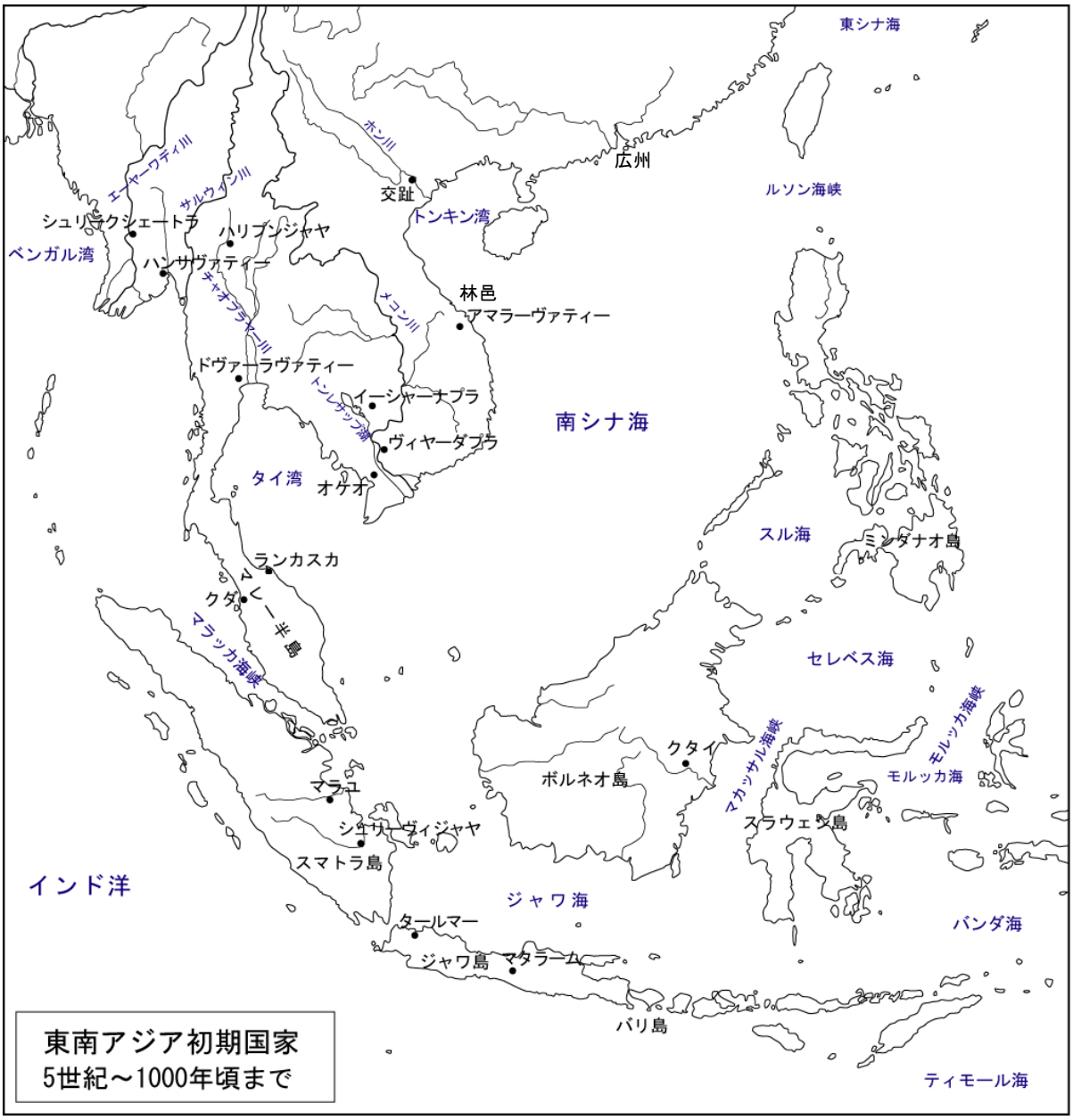
4) ボロブドゥールの意味
・仏教の教理を発展段階に即して表示する「仏教百科事典」: 初期仏教～部派仏教（前生物語と仏伝）、大乗仏教（華厳経）の教理を示す浮き彫りと、密教（金剛頂経）の教理を示す仏像群
・仏像は密教の五仏を表現。『金剛頂経』＞古ジャワ語仏典『聖大乗論』

7. 上座仏教の展開
・ 部派仏教の中から展開。パーリ語を経典の言語とする。
・ スリランカ⇒ビルマ⇒タイ⇒カンボジア、ラオス

8. おわりに
1) パーリ上座仏教興隆以前のアジア仏教の多様性
・ サンスクリット語（漢訳、蔵訳）: 大乗（＋密教）＋部派仏教（有部、正量部、大衆部）
・ パーリ語：部派仏教（上座部）
・ チベット語：大乗（＋密教）
2) インド＋スリランカにおける仏教の助走的な展開⇒グプタ朝以降の爆発的な拡張
・ サンスクリット・コスモポリスの出現
・ 「インド化」の時代
・ 「仏教東漸」（北伝中心から南伝も視野に入れた）
3) 地域と時代による変化
・ 最初期の扶南の役割は重要
・ 東南アジア全域にわたって有部、正量部、上座部、大衆部が流布。
・ 島嶼部（スマトラ島、ジャワ島）における大乗仏教の発展
・ ただし、12 世紀末カンボジア・クメール朝のジャヤヴァルマン 7 世は大乗仏教を信奉
4) なぜ東南アジアにおいて（パーリ上座以前の）仏教とヒンドゥー教は衰退したのか。
・ 「国家（独占）の宗教」から「民衆（動員）の宗教」へ。（宗教の本質というよりは、宗教の変化または変化しなかったことがポイント）

参考資料
仏教用語
・ 優婆塞（うばそく、upāsaka）: 男性の在家信者
・ 優婆夷（うばい、upāsikā）: 女性の在家信者
・ 比丘（びく、 bhikkhu）: 男性の出家者
・ 比丘尼（びくに、bhikkhuni）: 女性の出家者
・ 僧伽（さんが、saṅgha）: 比丘と比丘尼から構成される教団
・ 仏陀（ぶっだ、buddha）:「悟った人」原始仏教では釈迦牟尼に対する尊称。大乗仏教では三世十方世界に多数の仏陀（阿弥陀仏など）の存在を想定する。
・ 阿羅漢（あらかん、arhat）:「尊敬を受けるに相応しい人」修行者として最高の段階にある人。
・ 菩薩（ぼさつ、bodhisatta）:「悟りを求める存在」原始仏教では悟る前（前世を含む）の釈迦牟尼対する尊称。大乗仏教では多数の菩薩（観世音菩薩など）の存在を想定する。

地図



Toru AOYAMA, ver 2.2 2012-07-31

年表（☆はスリランカ関係）

年代	事項
前5世紀頃	ブッダ活躍（～前383年）
前283年頃	この頃、第2回仏典結集。この頃、根本分裂。
前268年頃	☆マウリヤ朝のアショーカ王即位。スリランカなどに仏教を伝道。
前100年頃	部派分裂終わる。大乗仏教運動始まる。
前100年頃	☆スリランカにアバヤギリヴィハーラ（進歩派）建立。マハーヴィハーラ派（保守派）と対抗。
1世紀	初期大乗経典成立（～250年頃）
67年	後漢に仏教伝来、白馬寺建立。
320年	グプタ朝、成立。サンスクリット語を宮廷の公用語とする。
399～413年	東晋の法顕、陸路インドに至り、スリランカを経て海路で帰国。『高僧法顕伝』
415～450年頃	☆ブッダゴーサ、スリランカに滞在し『清浄道論』（ヴィシュディマッガ）をパーリ語で執筆。
431年	☆求那跋摩、スリランカ、ジャワを経て宋に大乗戒を伝える。

435年	☆求那跋陀羅、スリランカを経て宋に至り大小乗諸経を訳す。
400～480	世親（ヴァスバンドゥ）、活躍。『倶舎論』、『唯識二十論』など。
5世紀	グプタ朝、ナーランダー寺院を創建。
6世紀初頭	グプタ朝、衰退。
538年	百済から日本に仏教公伝。
629～645年	唐の玄奘、西域諸国を経てインドで学ぶ。『大唐西域記』、『大慈恩寺三蔵法師伝』
671～695年	唐の義浄、南海諸国を経てインドで学ぶ。『南海寄帰内法伝』、『大唐西域求法高僧伝』
7世紀後半	金剛頂経、南インドで基本形が成立。インドで密教が隆盛。
714年	広州に市舶司（海上貿易管理機関）が設置。
718年	不空、ジャワで金剛智と出会う。
720年	金剛智、洛陽に到着。
736年	インド僧菩提僊那、林邑僧仏哲、来日。
746年	不空、長安に再来、密教経典を多数訳出。不空⇒恵果⇒空海
752年	東大寺大仏、菩提僊那が導師となって開眼供養。
790年頃	ボロブドゥールの建立始まる。仏伝・ジャータカ・華厳経・金剛頂経に依拠。
794年頃	チベットのサムイェー寺の宗論でインド密教派が勝利。
806年	空海、日本に帰国。真言宗を開く。
10～11世紀	☆インド本土のチョーラ王国（ヒンドゥー教）がスリランカを侵攻し、仏教教団は壊滅。
1044年	ビルマにアノーヤター王がパガン朝を樹立。上座仏教を保護。大乗仏教も並立。
1070年	☆スリランカ、チョーラ勢力を駆逐し、ビルマのパガン朝から僧侶を招聘し、仏教を復興。
1180年	☆ビルマからスリランカに僧を派遣し、スリランカの上座仏教を導入。
13世紀	タイにスコータイ王国を樹立。ビルマから上座仏教を導入。
1308年	カンボジアでパーリ語刻文が出現。

史料

『大正大蔵経』（データベース：http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html）

1. 慧皎撰『高僧傳』（大正大蔵経　史伝部　第 50 巻 No. 2059）における東南アジア。
元嘉（げんか）：南北朝時代、宋の文帝劉義隆治世の年号。424 年−453 年。

「求那跋摩」T2059-50-340a-342b

求那跋摩。此云功德鎧。本刹利種。累世爲王治在罽賓國。祖父呵梨跋陀。此言師子賢。以剛直被徙。父僧伽阿難。此言衆喜。因潛隱山澤。跋摩年十四便機見俊達深有遠度。仁愛汎博崇德務善。其母嘗須野肉令跋摩辦之。跋摩啓曰。有命之類莫不貪生。夭彼之命非仁人矣。母怒曰。設令得罪吾當代汝。跋摩他日煮油誤澆其指。因謂母曰。代兒忍痛。母曰。痛在汝身吾何能代。跋摩曰。眼前之苦尚不能代。況三途耶。母乃悔悟終身斷殺。至年十八相公見而謂曰。君年三十當撫臨大國南面稱尊。若不樂世榮當獲聖果。至年二十出家受戒。洞明九部博曉四含。誦經百餘萬言。深達律品妙入禪要。時號曰三藏法師。至年三十罽賓王薨。絶無紹嗣。衆咸議曰。跋摩帝室之胤。又才明德重。可請令還俗以紹國位。群臣數百再三固請。跋摩不納。乃辭師違衆林棲谷飲。孤行山野遁迹人世。後到師子國觀風弘教。識眞之衆咸謂已得初果。儀形感物見者發心。

後至闍婆國。初未至一日闍婆王母夜夢見一道士飛舶入國。明旦果是跋摩來至。王母敬以聖禮從受五戒。母因勸王曰。宿世因緣得爲母子。我已受戒而汝不信。恐後生之因永絶今果。王迫以母勅。即奉命受戒。漸染既久專精稍篤。頃之隣兵犯境。王謂跋摩曰。外賊恃力欲見侵侮。若與鬪戰傷殺必多。如其不拒危亡將至。今唯歸命師尊不知何計。跋摩曰。暴寇相攻宜須禦捍。但當起慈悲心勿興害念耳。王自領兵擬之。旗鼓始交賊便退散。王遇流矢傷脚。跋摩爲呪水洗之。信宿平復。王恭信稍殷。乃欲出家修道。因告群臣曰。吾欲躬＊棲法門。卿等可更擇明主。群臣皆拜伏勸請曰。王若捨國則子民無依。且敵國凶強恃險相對。如失恩覆則黔首奚處。大王天慈寧不愍念。敢以死請申其悃愊。王不忍固違。乃就群臣請三願。若許者當留治國。一願凡所王境同奉和＊上。二願盡所治内一切斷殺。三願所有儲財賑給貧病。群臣歡喜僉然敬諾。於是一國皆從受戒。王後爲跋摩立精舍。

躬自引材傷王脚指。跋摩又爲呪治。有頃平復。導化之聲播於遐邇。隣國聞風皆遣使要請。時京師名徳沙門慧觀慧聰等。遠挹風猷思欲餐禀。以元嘉元年九月。面啓文帝。求迎請跋摩。帝即勅交州刺史令汎舶延致觀等。又遣沙門法長道沖道俊等往彼祈請。并致書於跋摩及闍婆王婆多加等。必希顧臨宋境流行道教。跋摩以聖化宜廣不憚遊方。先已隨商人竺難提舶欲向一小國。會値便風遂至廣州。故其遺文云。業行風所吹遂至於宋境。此之謂也。（後略）

2. 法顕『高僧法顕傳』（大正大蔵経　史伝部　第 51 巻 No.2085）。646 年成立。
長澤和俊（訳注）『法顕伝・宋雲行紀』（東洋文庫）1971、平凡社。

「耶婆提」T2085-51-865c-866b

（前略）乃到一國。名耶婆提。其國外道婆羅門興盛。佛法不足言。停此國五月日。復隨他商人大＊舶上亦二百許人。齎五十日糧。以四月十六日發。法顕於＊舶上安居。東北行趣廣州。一月餘日夜鼓二時遇黒風暴雨。商人賈客皆悉惶怖。法顕爾時亦一心念觀世音及漢地衆僧蒙威神。得至天曉。曉已諸婆羅門議言。坐載此沙門。使我不利遭此大苦。當下比丘置海島邊。不可爲一人令我等危嶮。法顕檀越言。汝若下此比丘亦并下我。不爾便當殺我。如其下此沙門。吾到漢地當向國王言汝也。漢地王亦敬信佛法重比丘僧。諸商人躊躇不敢便下。于時天多連陰海師相望僻誤。遂經七十餘日。糧食水漿欲盡。取海鹹水作食。分好水人可得二升。遂便欲盡。商人議言。常行時政可五十日便到廣州。今已過期多日將無僻耶。即便西北行求岸。晝夜十二日到長廣郡界牢山南岸。（後略）

3. 義浄『南海寄歸内法傳』（大正大蔵経史伝部第 54 巻 No.2125）に記載された東南アジア。
現代語訳　宮林昭彦・加藤栄司訳『南海寄帰内法伝：七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法藏館、2004.

1) 「尸利佛逝國」T2125-54-205b（巻第一　序章）（現代語訳 p.11-15）
故五天之地。及南海諸洲。皆云四種尼迦耶。然其所欽處有多少。摩揭陀。則四部通習。有部最盛。羅荼信度［原注：西印度國名］則少兼三部。乃正量尤多。
　北方皆全有部。時逢大衆。南面則咸遵上座。餘部少存。東裔諸國雜行四部
［原注：從那爛陀東行五百驛。皆名東裔。乃至盡窮。有大黒山。計當土蕃南畔。傳云。是蜀川西南。行可一月餘。便達斯嶺。次此南畔。逼近海涯。有室利察呾羅國。次東南有郎迦戍國。次東有社和鉢底國。次東極至臨邑國。並悉極遵三寶。多有持戒之人。乞食杜多是其國法。西方見有。實異常倫］
　師子洲並皆上座。而大衆斥焉。然南海諸洲有十餘國。純唯根本有部。正量時欽。近日已來。少兼餘二
［原注：從西數之。有婆魯師洲末羅遊州即今尸利佛逝國是。莫訶信洲。訶陵洲。呾呾洲。盆盆洲。婆里洲。掘倫洲。佛逝補羅洲。阿善洲。末迦漫洲。又有小洲。不能具録］

　斯乃咸遵佛法。多是小乘。唯末羅遊少有大乘耳。諸國周圍。或可百里。或數百里。或可百驛。大海雖難計里。商舶串者准知。
　良爲掘倫。初至交廣。遂使總喚崑崙國焉。唯此崑崙。頭捲體黒。自餘諸國。與神州不殊。赤脚敢曼。總是其式。廣如南海録中具述。
　驩州正南歩行可餘半月。若乘船纔五六朝。即到匕景。南至占波。即是臨邑。此國多是正量。少兼有部。西南一月。至跋南國。舊云扶南。先是裸國。人多事天。後乃佛法盛流。惡王今並除滅。迥無僧衆。外道雜居。斯即贍部南隅。非海洲也。
　然東夏大綱多行法護。關中諸處僧祇舊兼。江南嶺表有部先盛。
2) 「北天南海」T2125-54205c（巻第一　序章）（現代語訳 p.17-18）
【中略】
　其四部之中。大乘小乘區分不定。北天南海之郡。純是小乘。神州赤縣之鄉。意存大教。自餘諸處大小雜行。考其致也。則律撿不殊。齊制五篇通修四諦。若禮菩薩讀大乘經。名之爲大。不行斯事號之爲小。所云大乘無過二種。一則中觀。二乃瑜伽。中觀則俗有眞空體虚如幻。瑜伽則外無内有事皆唯識。斯並咸遵聖教。孰是孰非。同契涅槃。何眞何僞。意在斷除煩惑拔濟衆生。豈欲廣致

紛紜重増沈結。依行則俱昇彼岸。棄背則並溺生津。西國雙行理無乖競。
3）「室利佛逝國」T2125-54-225c（巻第三　第三十章　旋右観時）（現代語訳 p.309）
又如室利佛逝國。至八月中以圭測影不縮不盈。日中人立並皆無影。春中亦爾。一年再度日過頭上。若日南行。則北畔影長二尺三尺。日向北邊南影同爾。
4）「南海佛逝國」T2125-54-229c（巻第四　第三十四章　西方学法）（現代語訳 p.362）
南海佛逝國。則有釋迦雞栗底［原注：今現在佛誓國。歴五天而廣學矣］
5）「室利佛誓」T2125-54-229c（巻第四　第三十四章　西方学法）（現代語訳 p.363-364）
遂得旋踵東歸鼓帆南海。從耽摩立底國。已達室利佛誓。停住已經四年。留連未及歸國矣
6）「佛誓」T2125-54-233b（巻第四　第四十章　古徳不為）（現代語訳 p.420）
遂以咸亨二年十一月。附舶廣州擧帆南海。縁歴諸國＊振錫西天。至咸亨四年二月八日。方達耽摩立底國。即東印度之海口也。停至五月。逐伴西征。至那爛陀及金剛座。遂乃周禮聖蹤旋之佛誓耳。

参考文献

青山亨. 1998. 「ボロブドゥールとプランバナン」『季刊 文化遺産』5: 14-21.
———. 2007. 「インド化再考―東南アジアとインド文明との対話―」『総合文化研究』10: 122-143.
———. 2010.「ベンガル湾を渡った古典インド文明―東南アジアの視点から―」『南アジア研究』22: 261-276.
池端雪浦ほか編. 2001. 『原史東南アジア世界』（岩波講座東南アジア史 1）岩波書店.
石井和子. 1988. 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーンカン（聖大乗論）』全訳」『伊藤定典先生・渋沢元則先生古希記念論集』pp.57-99, 東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室.
———. 1994. 「ジャワの王権」『変わる東南アジア史像』pp.69-89. 山川出版社.
河上麻由子. 2011. 『古代アジア世界の対外交渉と仏教』山川出版社.
金岡秀友・編. 1977. 『部派仏教＜シンポジウム仏教＞』佼正出版社.
金岡秀友・柳川啓一・監修. 1989.『仏教文化事典』佼正出版社.
千原大五郎. 1975. 『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会.
長澤和俊・訳注. 1971. 『法顕伝・宋雲行紀』（東洋文庫）平凡社.
———・訳注. 1996. 『法顕伝 訳注・解説―北宋本・南宋本・高麗大蔵経本・石山寺本四種影印とその比較研究』雄山閣.
長澤和俊・翻訳. 1998.『玄奘三蔵：西域・インド紀行』（講談社学術文庫）講談社.
中村元ほか編. 1973. 『東南アジアの仏教：伝統と戒律の教え』（アジア仏教史インド編 6）佼正出版社.
奈良康明. 1979. 『仏教史 I インド・東南アジア』（世界宗教史叢書 7）山川出版社.
奈良康明・他編. 2010. 『仏教の形成と展開　インド II』（新アジア仏教史 2）佼成出版社.
———・他編. 2011. 『静と動の仏教　スリランカ・東南アジア』（新アジア仏教史 4）佼成出版社.
深見純生. 1999. 「ジャワ古代史の再構築―シーマ定立の政治学」『岩波講座世界歴史 6 』岩波書店.
松永恵史. 1999. 『インドネシアの密教』法蔵館.
水谷真成・翻訳. 1999. 『大唐西域記』3 巻（東洋文庫）平凡社.
宮林昭彦・加藤栄司・翻訳. 2004.『現代語訳 南海寄帰内法伝―七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館.
Coedès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. The University Press of Hawaii, East-West Center.
Casparis, J. G. de. 1956. *Selected Inscriptions from the 7th to the 9th century A.D.* (Prasasti Indonesia II). Bandung.
Damais, Louis-Charles. 1952. Études D'Épigraphie Indonésienne III. *BEFEO* 46: 1-105.
Dumarçay, Jacques. 1991. *Borobudur*. (Images of Asia) 2nd ed. Oxford University Press.（西村幸夫監修、藤木良明訳. 1996.『ボロブドゥール』学芸出版社）
Pollock, S. 1996. "The Sanskrit Cosmopolis, 300-1300: Transculturation, Vernacularization, and the Question of Ideology." In J.E.M. Houben ed. *Ideology and Status of Sanskrit: Contribution to the History of the Sanskrit Language*, Leiden, New York: E.J. Brill, pp. 197-247, 1996.
Staal, J.F. 1963. "Sanskrit and Sanskritization." *The Journal of Asian Studies* 22 (3): 261-275.